

大正十五年秋 今井神社社殿新築す。

行盛神社の祭祀

琉球史に、尙清王天文十四年(西曆一五四五)大島に新立王殿を建て、祝女をして、平家の殘黨を追祀させたとある。

大正十五年六月、私が瀬戸内海方面の史蹟資料調査の際、東方村油井で、御維新前の遠島人江戸の國學者笹文次の寄寓した神宮司家から發見した古書、平家御落人の次第軍物語寶曆八年寅十二月通常與人格壽父、瀬名方黍横目貞俊連名の寫本に據れば

嘉靖廿四年辰二月首里王公力なし新立王殿を建立し、平家の落人行盛を神に祀るやうになつたので、毎年二八月七日の兩度祭禮の節瀬名方古見方住用間切三ヶ所の乃呂久目寄り集つて祭詞を唱和したとの意味が書かれてある。尙同書に

本琉球時代中山王より行盛へ御諡號の事、

一 行盛御墓所向南の方へ海有方之日本造の船通候傳者俄に西風吹起怪我而已有之候故行盛卿の御怨靈にて右の通り有之候段七島船頭より首里の王公へ右次第御訴訟申上候に付嘉靖二十四年辰二月首里御事御諡號

一 新立王殿と御唱へ二八月七日年々兩度づゝ瀬名方古見方住用方三ヶ所に野呂久目差寄せ御祭仕旨被仰及今に仕來り申候然に中頃住用間切の野呂久目右爲御祭禮舟より瀬へ參り候砌り破船及怪我

其後瀬名へ罷越候俄相止申候事

一 古見方瀬戸方家數より米二合五勺づ、取合御神酒造調着に拵へ野呂久目中差寄皆と御祭禮仕候事、中略

一 右ヶ條の通寫にて傳來候文字の○失ま、相寫し差上候二八月七日行盛御祭の節、戸口之乃路久目祭言葉の次第左に記申上候

右は、行盛神社祭禮に關する記録である。之に依つてみれば、行盛の靈魂が大島近海を航海する大和型の船に崇つて禍をかけたらしい、其爲琉球王から神社を建て、神と祀り行盛の怨靈を慰め奉つてある。現在の行盛神社は龍郷村戸口の中央の小高い森の中に建てられてゐる。社守の話に依れば、行盛神社に對する戸口近村の島民の信仰は非常なもので、行盛城の址からは、いろいろの古器物やら、武具などが發掘されたと、行盛の來島を信じきつてゐた。左に平家御落人の次第軍物

語に書かれてある、當時の乃呂久目の祭言葉を解釋してみる。

行盛神社祭詞

行の盛

行の嶽

あをりや上

さすかさ

みよこの明川

島が上

國が上

大城盛城

よいみ神

よい男

行盛神社の祭詞

瀬名の新立王殿
やわれしのくら
二俣大膳友野光成
金久ぬき丸
あまのきみ
大美田こは
盛のみ神
松の君
そこのきみのみ神
あちよそ人が
わ王そ人が

このだるあ蔵しちや
よこせしちや
よいみ神
よい男

はいもとの伊平
主いへつかさ
ありきへの
ふさけわろ
よいみ神
よい男

戸へら口

おかうれたち

ひりやらしや

なさししや

よいみ神

よい男

古見城

みうらはろ

おいけなめ

よせけなめ

よいみ神

よい男

宮の守り

宮のかしら

おいけなめ

よいみ神

よい男

右の祭詞を譯すると

行盛の城塞に

行盛の御嶽に

み横の明川に

行盛神社の祭祀

貴い佐司笠のみ神よ

島の上國の上

行盛の居城に

天降り給へ

尊きみ神

偉なるお尊。

註 さすかさは至上の神といふ意味、王尙清の妹に佐司笠按

司眞鍋樽といふ祝女神を云ふので、おもろでは尙ほ王の守護

神として歌はれてゐる。

おもろをさうし一の巻の五章

あをりやへがふし尙巴志の出陣を歌つたおもろに

一、きこへさすかさが

さしぶ、おれかわて

ともゝとの、よそくせぢ

あんどおそいに、みおやせ

又とよむ、さすかさが

むへき、おれなおちへ

又げおの内は、おしあけて

しよりもり、おれわちへ

又もちろ内は、つきあけて

まだまもり、おれわちへ

又あちおそいよ、ほこて

たゞみきよよ、ほこて

解 貴い佐司笠按司

天降り給いて

千代かけて國を知ろしめさむ

稜威を我が王に奉らせ給へ

京の内を押開き首里社に天降り給ひ

我が王を祝福し給ひて

おもるでもさすかさは國を護る絶大能力を持つ、至上至善至美の神に歌はれてゐる。行盛神社の祭詞にあるさすかさもおもろのさすかさと同意である。

瀬名の新立王殿には

強い武士の魂

二俣大膳友野光成

金久ぬき丸、(尙眞王の子オモロネアガリ豫言者)

天の君(行盛を神としての尊稱)

大美田山には

行盛の靈を祀る

松の君は

其處の君のみ神

註 戸口行盛城の正門に昔松の大木があつた。當時島の人
は松の大木を行盛の靈と信じてゐた。

吾朝祖人が(お國元の人)

吾王祖人が(追句右と同意)

築いたお城は

よこせしちや(不明)

尊きみ神

行盛神社の祭祀

偉なるお尊。

奥津干潮の
南方の伊平いへやは

註 尙圓王の生國伊平屋島を指す。

吾が王公の祖國

其處を守れよ

帆上げて走れよ、

尊きみ神

偉なるお尊。

敵が攻め寄せて來たら

城門から
岡へ降りて
討ち返せよ
尊きみ神
偉なるお尊。

古見城の沖を
み浦走る船よ
追ひかける波を
追ひ返せよ
寄せかける波を
追ひ散らせよ

尊きみ神
偉なるお尊。

宮の守り

宮のみ神

追ひ馳ける敵を

追ひ返せ

寄せ馳ける敵を

追ひ散らせ

尊きみ神

偉なるお尊。

結

論

結

論

奄美大島島民は、明治維新前數世紀の間、隸屬屈從の生活に慣らされて、其惡弊は現在二十三萬餘の島民の民性の蔭翳となつてゐるが、教育の徹底と産業開發に依り、明治末期以後の若き大島島民は過去の民族的屈從時代を考へ、奮然と立つて、大島開發に努力しつゝあるのである。更に奄美大島は、日本の國防上重要な要塞地となつて、彼のワシントン軍縮會議で問題にされ、世界各國環視の的となつてゐる。

大正十五年の秋、大島島民は、古仁屋に高松宮殿下をお迎へ奉り更に

又昭和二年八月六日に畏くも聖上陛下の御幸をお迎へ奉つて、島民は無上の光榮に浴した。

今後、島民は偏狹な排他的利己的島根性を排さねばならぬ。大島島民の感じは暗くて、卑屈である。吾々島民は、總べてのものを明るく、廣く觀て、奄美大島の民性を強く、美しく、明るく、輝かさねばならぬ。

世人は大島を評して、蘇鐵地獄と云ふ。此の評は少々苛酷に過ぎるが、島民が何ら、自覺せず、舊來の傳統的民性の渦から抜けずに、日常生活や産業、凡ゆる方面の改善を實行せぬ限り、近き將來に於て、蘇鐵地獄以上の悲境に陥ること、思ふ。

郷土を愛せよ、そして土地を手離す勿れ。

私は常に島民に向つて斯く叫んでゐる。大島に生れ、大島に育ち、大島の學資で修業して、肩書と職を得ると大島を捨て、大島人であることを恥ぢて、郷土を秘して語らぬ淺ましい心を持つた者が随分多い。甚しい者は祖先の骨まで掘り出して、内地へ走るのである。

斯かる者は一部の人士に限られてゐるが、多くの眞面目な青年は、薩藩の壓制にあつて二世紀半も苦しんだ祖先の生活を考へ、奮然と立つて、大島開發に努力してゐる。實に喜ばしい次第である。

大島を復興させるには過去の歴史と自分の立場を深く考へ、而して郷土文化の建設に、又産業の開發、教育の徹底等凡ゆる方面に努力せなければならぬ。

總べて大なる創業には、大なる發奮努力を要する。島民の發奮努力の根柢となるものは、島民の民族的背景即ち歴史である。滅びゆく大

島を復興させ、來るべき蘇鐵地獄から救ひ出すことは二世紀半も薩藩の壓制の許にあつて、苦慘の生涯を終つた祖先の靈に對し又國防の第一線にあつて、奄美大島要塞を守る吾々廿三萬島民の、皇國に奉ずる大なる義務である。

奄美大島民族誌終

跋 文

伊 波 普 猷

跋

奄美大島を訪れたことのある人は、其の住民の顔面、胸部、手指共に多毛を以て覆はれてゐるのを見て、アイヌを聯想したのであらう。三十幾年か前に、ストラスブルグ大學の動物學の教授のデーデルライン博士は、之を見て、アイヌの血が混じてゐると斷言されたが、同じ頃、ベルツ博士も亦、小倉の師團で大島の兵士百五十人の體格を測定して、同様なことを言はれた。其後チャムバレン氏は、宮島幹之助博士の材料によつて、與那國島にアイヌ的地名のあることを知り、古くは

沖繩諸島にもアイヌがゐたに違ひないと言はれた。明治三十七年の夏、鳥居龍藏博士も沖繩諸島を探検されたが、荻堂ウシヂョウの貝塚から出土した石器、石斧、牙の裝飾、輪廓の紋様等が、能く其の人種的表出を示して、日本石器時代のそれと同一系統に屬するものなることを知り、且又其の住民中に、毛深い者の少ないのを見て、沖繩人の血管中にも、やはりアイヌの血が流れてゐるのではないかと疑はれた。それから八重山に行かれた時、郵便局に奉職してゐた毛むくぢやらな大島人を見て、其の胸部の二寸位の毛數本を貰つて、アイヌのそれと比較して見るといつて居られた。

爾來三十年、本邦の學者中、進んでこの問題の解決に當らうとする者なく、數年來南島研究が盛んになつて、沖繩方面には多大の注意が

拂はれたに拘らず、奄美大島は不相變學界の處女地であつた。が、この處女地は、近頃漸く掘りかへされて、年來の謎を解くべき遺物が、數ヶ所から出たといはれてゐる。その考古學的研究の結果は、まだ發表されないが、昨年去年の夏頃、福岡高等學校の玉泉教授が、琉球から出た石器三十八點、土器十數點、其他の資料から見て、琉球全體にアイヌがゐたことを證明されたとのことだから、アイヌが大島にゐたことも略々推測することが出來よう。昨年去年の冬、九州大學の教授の某醫學博士も、名瀬の小學校の兒童千數百人に就いて、血精學的調査をされたが、アイヌの係數と略々同一なのが出たとのことである。私はこれについての二氏の論文又は報告を見てゐないから、はつきりした事はいへないが、何だかデーデルライン博士等の説の裏書される時

が近づいたやうな気がしてならない。

一昨年の秋頃であつたか、アイヌ學會のあつた時、私は端なくも珍しい材料を得た。晚餐の時、私の向ひに眼のへこんだ毛深い青年が坐つてゐたのを見て、大島の人とばかり思つてゐたところが、あとでこの青年が遠星といふアイヌであると聞いて吃驚した。そして其の演説を聴くに及んで、其の發音や語調が大島の人のそれにそつくりだつたので、二度吃驚した。私がまのあたりアイヌを見て、直接其の話を聞いたのは、此が初めてだつた。遠星君には其の後も屢々會つて、其の發音や語調を觀察したが、彼がアイヌの部落中で、最も日本化した餘市（よこし）のアイヌで、しかも其の母語を全く話すことが出来ないと聞いたので、其の發音や語調は、ことによると、近所にゐる和人（シヤモ）の

影響を受けたものか、さもなければ、彼の個人的特徴ではないかと思つて、他のアイヌのそれを聞く機會を待つてゐた。昨年の秋、アイヌ向井山雄氏を歓迎する爲に、アイヌ學會が開かれた時、私は半ば好奇心に驅られて、出席して見た。向井氏は、膽振の有珠の會長の子で、パツチラー師の下で働いてゐる宗教家であるが、その顔附が大島の上流社會の紳士そつくりだつた。しかも其の發音や語調が、遠星君のより一層大島的小のを聽いて、面白いと思つた。これは恐らく今日まで何人も氣づかなかつたことであらう。かくもかけ離れた所に居る兩民族の間にかくも著しい類似の存するのは、たゞ不思議といふの外はない。これは果して偶然の一致だらうか。私の聽覺印象は、考古學的、人類學的、血精學的證明法のやうに、學的ではない

かも知れないが、これらの學的證明と相俟つ時、何かの役に立つやうな氣がしてならない。

思ふに、アイヌ族は沖繩諸島では、優勢な南島人に抱合されて、殆ど其の痕跡を失つたが、大島では、比較的大勢だつた爲に、抱合されながらも、其の相手に多毛の特質を與へ、其の上發音や語調にも影響を及ぼして、著しく其の痕跡を留めてゐるのではあるまいか。南島特に大島諸島には、到る所に毛人退治の傳承があるが、これなども二者の葛藤をほのめかしてゐるやうな氣がする。又宮島博士が人類學會雜誌第九卷第九十一號に出された「琉球の入墨とアイヌの入墨」の一篇も、二者の間に何等かの關係のあつたことを教へてゐるやうな氣がする。

それから、大島の民謡の曲が、アイヌのそれに似て、西樂の匂ひのするものも、注意すべきことである。鳥居博士の『有史以前の日本』中に、アイヌ族が大露西亞人と蒙古人との混血兒であるといふ説が見えてゐるのを知つたら、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

以上私は有史以前の奄美大島について想像を逞しうして見た。これより其の有史以後を瞥見することにしよう。

私はかつて、南島人は日本民族の遠い別れであつて、古代生活の様式を多く保存してゐる、といつたことがあるが、わけても交通不便な奄美大島諸島が、國語の寶庫とも古俗の博物館ともいへるやうな氣がする。試みに一二の例を擧げて見よう。其處には風葬の古俗が今なほ遺つてゐる(雜誌「民族」第二卷七月號所載拙稿「南島古代の葬儀」)

参照)。其處ではまゝ、(寛同衾)といふ語がまだ生きて使はれてゐる。そして其の民謡には「めをとまぐはひ」(夫婦同衾)といふ文句さへ見出される。徳之島の平土野附近の方言では、女陰をホタといひ、或はホツタ・ホータともいつてゐる。この一斑を見ても、全豹を窺ふことが出来るであらう。

大島語は琉球語の方言であり、其の民間傳承に、琉球國初の神アマミキヨは、最初海見嶽に天降りしたが、暫らくの後沖繩へ渡つたといふことがあるのを見ると、沖繩人と大島人とは、日本民族と手を別つた當時、同一の島にゐたものが、何かの事情で分離したことがわかる。十三世紀の末葉、エゾノイクサモイ(英祖王)の威令が、沖繩本島以外に行はれた時、大島人は初めて沖繩に入貢したが、二回の鬼界島征伐と

回の大島征伐とを経て、遂に全く沖繩化されて了つた。然るに、慶長役の敗戦の結果、沖繩が島津氏の密貿易の機關となつた頃、大島・徳之島・鬼界・永良部の四島は島津氏の直轄となつて、爾來三世紀の間、悪政の下に呻吟するやうになつた。

島津氏は、沖繩と大島との精神的連鎖を斷切るために、寛永三年、四島の人民を欺き、其の系圖及び古記録を悉く取上げて、焼拂つて了つたので、慶長以前に於ける二者の關係は、殆ど辿れないやうになつてゐるが、其後の事は、各島の代官記、其の後の記録及び口碑等によつて、僅に知ることが出来る。島津氏が、大島諸島を支配した當時、租税は米穀を以て納めさせたが、延享二年に、米穀の代りに砂糖を以て納めさせることにして以來、大島諸島は宛然島津氏の砂糖製造所と化し

去り、其の住民は強制的に栽培に従事させられて、牛馬同様に鞭うたれるやうになつた。そして貢糖を納めて残つた分を餘計糖と稱し、之を以て薩藩から供給された米穀其の他の日用品と交換するやうにして、貨幣の使用が一切禁せられた。甚しきに至つては、自分の畑から甘蔗を取つて嚙つた爲に、死刑に處せられた者もあつた。大西郷が龍郷謫居中、この苛酷を視かねて、代官所に飛込んで、激論したことは島民の語る所であるが、この時村民は、斧鎌を武器として、代官所を襲撃し、爲に幾多の犠牲を出したといはれてゐる。かうした活劇は、各島で屢、演せられた。就中徳之島の犬田布騒動は、最も人口に膾炙する所である。これがやがて窮鼠猫を嚙むの類で、「王國の飾」といふ眞綿で首を締められた沖繩で、三百年間、一度たりとも暴動が起ら

なかつたに對して、面白い對照であるといはなければならぬ。

御維新になつて、彼等は島津氏の奴隸から解放された譯だが、鹿兒島縣人は彼等を解放する事を躊躇した。明治六年に、大藏省から大島郡では、勝手賣買所謂餘計糖の自由賣買をしても差支へないとの令達が出たが、時の縣令は之を秘して、島民に示さなかつたのみか、御用商人を大島諸島に派遣して、一手販賣の契約を結ばしめ、新に脱糖取締役を置いて、密賣を禁じた。「團々珍聞」が鹿兒島縣は日本帝國の内なりや」と皮肉つた當時の鹿兒島縣としては、やりかねまじきことであつた。この不法行爲は、明治九年に至つて、遂に暴露した。そして大山縣令が大島郡視察に出かけた時、島民は其の宿所を取圍んで、詰問しようと敦圍いたが、折柄暴風があつたのを幸ひ、縣令は水夫に

變装して、船に逃込んだ。郡民は早速總代五十人を上臈させて、陳情させたが、縣令は彼等を目するに沸騰組を以てして、直ちに谷山の監獄にぶち込んだ。間も無く西南の役が勃發したので、鹿兒島の反徒は彼等の中から強壯な者三十五人を選び、決死隊と名づけて出征させた。彼等の中には、各地で轉戦して斃れたものもあり、事が止んで、歸島する途中、颶風に遭つて、海底の藻屑となつたものもあつた。

明治十二年には、御用商人との契約期間が満ちて、島民はやつと一息ついたが、長年月の間、自分で賣買したことのない彼等は、狡猾なる商人の奸計に陥つて、負債に苦しめられるやうになつた。彼等は實に沖繩人以上に虐げられた人民であつた。泣くが如く訴ふるが如き彼等の音楽が、何よりも能く其の不幸を語つてゐるやうに思はれる。

る。

其後、大島諸島から東都に遊學する青年が續々と出たが、其の大多數が法律學校の門をくゞつたのは、注意すべきことである。今日では帝大出の人もかなりゐるが、其の大多數がやはり法律を修めたものであるのも不思議である。小さい割りに、大島郡ほど法律家の多い所はめつたにあるまい。過去に於て彼等を束縛したものは制度であつたから、解放された曉、島民がさういつたやうな知識を眞先に要求したのは、考へて見ると、無理のないことである。だが、彼等は其の過去を顧ることを嫌つた。之を知る時に、彼等は壓しつぶされるやうな氣がしたからである。

さういふ所に、それを知りたいといふ好奇心を起した一人の青年

があつた。彼は傳説の豊かな佳慶呂麻島芝の舊家の總領で、柳行李に一杯古記録を詰めて、東都に遊學したが、横濱上陸の際、肝心な柳行李を紛失した爲に、已むを得ず郷土研究者たることを斷念して、ロシア語の研究を始めるやうになつた。この青年こそは、今日ロシア文學研究者として有名な昇曙夢氏であつた。

爾來三十年、奄美大島には、一人の郷土研究者も出なかつた。ところが最近になつて、茂野幽考といふ郷土藝術の研究者が、突如として現れた。氏は一二年米國と南米とにゐて、音楽や舞踊を研究し、フィリピンを跋渉して、四五年前歸朝した人であるが、この三四年、郷里の島を隈なく歴廻り、三千首の民謡とかなり多くの民間傳承を蒐集して、『奄美大島民族誌』を著した。これはむしろ民謡及び音楽に現

れた奄美大島の研究ともいふべき好著で、これで漸く學界の處女地に鐵が打込まれたといへよう。

南島研究者の一人なる私は、思ひがけずもこの熱心なる學徒を見出したことを喜ぶの餘り、奄美大島觀を略述して跋に代へることにした。

昭和二年八月十九日の夜

伊波普猷

昭和二年九月五日印刷
昭和二年九月十五日發行

奄美大島民族誌與付
定價二圓七十錢

著作 所有	著作 發行 印刷者	著者 茂野 幽考
	東京市麴町區上六番町五番地 岡茂雄 東京市京橋區山下町一番地 清矣	

英文通信社印刷所印刷
中島製本所製本

發兌

東京市麴町區
上六番町五番地

岡

書

院

電話九段二七七五番
振替東京六七一九番

37

やんほるふの味趣
BOOK STORE SHIGEO
TAKASAGOCHO. OKAYAMA
店書をげし

昭和六年六月二十五日
小牧安實 敬

35.2.23

岡書院版